

『至福千年』－「一角」とミレニアム思想について

李, 忠奎

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

60

(開始ページ / Start Page)

308

(終了ページ / End Page)

300

(発行年 / Year)

2008-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003121>

『至福千年』

—「一角」とミレニアム思想について

人文科学研究科 日本文学専攻
博士後期課程三年 李 忠 奎

序

長編の『荒魂』（昭和三十八年一月〜三十九年五月）から僅か一年足らずの一九六五年一月から（九月休載、二十一回連載）翌年十月にかけて、『世界』に連載されたのがこの作品であり、同時期には芥川賞選評を含め、他にも『ゆう女始末』（昭和三十八年九月『世界』）や『靴みがきの一日』（昭和三十九年七月『世界』）等が書かれている。

この作品は主に初期に書かれた見立ての方法を思い出させる。例えば、『普賢』（昭和十一・六〜九『作品』）や『焼跡のイエス』（昭和二十一・十『新潮』）、それから『雪のイヴ』（昭和二十二・八『別冊文芸春秋』）や『かよひ小町』（昭和二十二・一『中央公論』）、『しのぶ恋』（昭和二十二・八『改造』）、または『処女懐胎』（昭和二十二・九〜十二『人間』）等である。この種の作品は昭和二十年代の前半までに書かれており、その後は殆ど見ることができない。

ところが、以前の見立ての方法によるイメージがより強烈に迫ってきて、読者の心を捉えていたのに対して、これは同様の方法をとりながらもどこかでその方法の破綻を垣間見ることができるといえる。例えば、見立てられた人物が複数であること、またそういう人物がみな殺されてしまうか、それとも自然消滅（徳マリリア）している。だから、厳密に言えば内記や一角が自らを「神」というのを見立てとして見るべきかどうかの疑問が残る作品でもある。

さて、本稿では加茂内記を中心とするのではなく、一角を中心に論じていき

たい。何故なら殆どの先行文献は内記を中心とし、また主人公として扱っている。

ただ、濫澤龍彦の「この小説の真の主人公は、一角によって「およそ下司の中の下司、身分の底をついて下下に生まれ、この世に生を享けたことが罪とかわまつたもの」（四五七ページ）と呼ばれたような、乞食非人をはじめとする無名の下層民衆そのものではなかったらうかという気がしないでもない」（『至福千年』—「解説」（一九八三・八岩波書店 後、『すばる』昭和六三・四臨時号—「石川淳追悼記念号」に掲載される））としているところから考えれば、片隅に一角を念頭に入れていることは判るけれど加茂内記を主人公にしていることには変わらない。そのため多くの論文に内記がミレニアム思想を江戸に顕現させようとしたが彼の死によって、また一角が「ええぢやないか」を尻目に見ながら横浜へ駆け出していくことを以って千年王国の試みは挫折したという書き方を見る。しかし、果たしてそうなのだろうかという疑問を払拭することは出来ない。

故に本稿では内記が目論んだ「開国の大業」（傍点 引用者）と、一角の伊勢参りや高田富士と相俟って起きた「ええぢやないか」に見るミレニアム思想との関係を中心に論を進めることにしたい。

—

至福千年とはいうまでもなくキリストが再臨して、善悪を別ける審判が行われ、善人とともにキリストの王国が千年間続くという信仰のことである。このことに

ついで野口武彦『海燕』―「江戸がからになる日」昭和六三・三三がノーマン・コーンの『千年王国の探求』(『The Pursuit of the Millennium』初版一九六一年。後、一九七八年江川徹訳では『千年王国の追究』となつてゐる)を参考にしながら以下のように述べている。

この教義は、AD四三一年のエフェソスの宗教会議によつて異端信仰とされた。なにしろ、生前のイエスが約束した「地上の王国」は教会制度としてすでに実現していると公示したローマ・カトリシズムのことである。その後、「千年王国思想」は、民衆宗教の世界へと、急速にアンダーワールド化するようになる。そしてその運動は古代から近代にいたるヨーロッパの精神史および政治史を通じて、間歇的また周期的に地表に噴出する。

野口武彦は「急速な社会変化を起す地域」が「安政・万延年間と似通つてゐる」とした上で、しかし作者(石川淳)はこの江戸に「千年王国思想」が生み出すほどの地ではないことは判つていたし、だから「江戸革命を紙上に架空する」と論じている。勿論これはこの作品が書かれる時期に起こつてゐた「六十年安保」と、江戸末期のこの時期が社会的混乱を招いたという意味で重なつてゐることによる。「千年王国思想」がローマ帝国の弾圧から民衆に拡散していつた信仰だとすれば、このテキストにもあるように切支丹、いわゆる隠れ切支丹を描いて他にない。江戸以前から何百年にわたる厳しい切支丹弾圧が鎖国と結びつてゐるのは史料が伝えている通りであるが、この鎖国と隠れ切支丹は開国と「千年王国」とにそれぞれ対応して、これを正しく解き明かすことが『至福千年』を読むことになるといえる。

さて、この作品について作者は藤田昌司『作家に聞いたちよつと面白い話』一九九〇・十一のインタービューに応じて「コミュニスト同士の血なまぐさい争いと結び付けて考えてしまう」との質問に「いいえ、現代社会を意識して、諷刺しようなどというつもりは全くありませんでしたよ。ただ、ミレニアムの思想を日本に置いてみたら、面白いだろうな、と思つただけで、もちろんミレニアム思想が日本に入つてきた形跡はなく、その影響を受けた人物も存在しません。だから小説になつたんです」と語つてゐる。この話は『江戸文学掌記』という作品で読売文学賞を受賞した時のこと」だという。実際この書が編まれた(『夷斎華言』(一九七七・四)―一九七八・五)に連載した一部と『続夷斎華言』(一九七九・一

一九八〇・三)の一部)のは一九八〇年六月であり、受賞したのは翌年二月五日である。『至福千年』が書かれて十五年後となる。しかし、この場合作者が自ら「現代社会を意識」しなかつたと述べたことを受けてそのまま考へる必要はなく、また「諷刺しようなどというつもりは全く」なかつたとも思わない。それは一角や内記の考へが必ずしも一致しないとはいへ、彼らに充分見て取れるからである。一角と内記を取りあげたからには早速二人の中に割つて入りたいが、それよりもまず、「ミレニアム思想」に暫らく止まりたい。

この「千年王国思想」は救世主イエス・クリストの再臨によつてのみ実現できるものである。しかし、それは現実に不可能であることは周知のことである。勿論内記や松太夫たちも同様の認識を持つてゐる。換言すれば彼らが真にこの江戸にミレニアム思想が実現できるとは毛頭思つていないという事実である。彼らが如何なる所以を以つて聖母マリアやイエス・クリストを持ち出したとしても所詮それは各々の欲望やそのための偽装と欺瞞の手段に過ぎない。上記した作者の言葉をそのまま受け取れば、日本にミレニアム思想がないからそれを架空して、この「ミレニアム」の思想を日本に置いてみよ」としたものだと思ふことができる。

もしこの国に無血革命といふものがおこなはれうるとすれば、負いくさはけだし千載一遇の絶好のチャンスであつた。あたへられた民主主義といふ思想がいかにあめえものであつたにしても、負いくさといふ現実歴史に決してあめえものではなかつた。人民はこの現実を人民の生活にとつて幸運であるやうな方向に切替へて、あめえ思想に筋金を入れることができない相談ではなかつたはずだ。これは死んだ子の年ではない。すなはち、このことが、今日、はもう不可能になつたと考へるよりも、できるだけすくない人民の流血の量をもつて、今日でもまだ可能だと考へたはうが、歴史条件に於て妥当であり、精神の運動にとつて便利だといふ意味だ。人民の生活は決してあきらめるなんぞといふことを知つてはならない。われわれは絶望的にあきらめませんよ。(傍点 引用者) 『革命とは何か』 昭和二六・八『文学界』

これは革命についての氏の認識である。革命が「今日、はもう不可能になつたと考へるよりも、できるだけすくない人民の流血の量をもつて、今日でもまだ可能だと考へたはうが、歴史条件に於て妥当であり、精神の運動にとつて便利」であるがために「江戸革命を紙上に架空」したといえる。

ところで、この革命は革命としてしか意味を成さないものだろうか。氏は『革命家の夢』(昭和四二・十一・十一『朝日新聞』夕刊)に於てノーマン・コーンの「ミレニアム研究」とジェームズ・ジョルの「ザ・アナキスト」の二書を挙げながらジョルの文を引用している。

「このたぐひの運動はその社会変革への要望の根柢をどこに置いたかといへば、ミレニアムはただちに可能だといふ信仰からこれを発した。つぎに来るものと、墮落以前のエデンの園の黄金時代への復帰との結合。」

この文は「異端と理性」の章に当たる部分で中世に於ける異端と見られた一群の運動についてのジョルの認識である。これが西洋のミレニアム思想だとした上で、東洋には「武陵桃源」があるけれど「今日の荘士諸君はなにをおもつてゐることやら」といふことは、革命家の夢はどこに消えたことやら」と、嘆息を吐いている。

言い換えればこのミレニアム思想は「社会変革への要望」に生きるものであり、またそれは「ただちに可能だといふ信仰」に端を発している。いわゆるこの意味に於てミレニアム思想は現実的(文学に於て)に革命として起こりうることを示唆しており、その実践として『至福千年』が書かれている。「社会変革への要望」は少なくとも「負いくさはけだし千載一遇の絶好のチャンスであつた」(『革命家の夢』)はずであるが、それは虚しく終わってしまった。けれども今現に「社会変革への要望」が社会的運動として起こっていたことも確かである。上記したように日米安全保障条約(事実上は日米軍事同盟である)いわゆる「六十年安保」がそれに該当しているともいえる。しかし、厳密にいえばこの種の運動は「ええちやないか」の民衆蜂起に即していえば「社会変革への要望」ではないだけでなく、そこに流血を見たからである。尚且つそれは日米安保に対する反対意志のそれに過ぎなかつたものであり、その後の全共闘運動もその域を出ない。それは戦後与えられた民主主義によって潰えたともいえるかも知れない。その故にもはや現代に於てミレニアム思想は革命を夢見るのは不可能となつた。しかし「今日でもまだ可能だと考へたはう」が云々との反論を予想していえば、それはよりその実現性が高く、聖地として相応しい地がこの江戸であつたとする作者の認識に他ならない。換言すれば、「暴力によって既成の体制を全面的にくつがえすことこそ、あたらしい秩序をうみだす不可欠の準備行動である」(『アナキスト』)ジェームズ・

ジョル著 荻原延寿・野水瑞穂訳 昭和五十・二 岩波書店)とするトーマス・ミュンツァー的運動(彼の革命運動を否定するものではなく、暴力を強調している点に於て)ではなく、ジョルが同書で「冷酷且つ無意味な暴力やテロによって、帳消しにされた」アナキストたちの行動を指摘しているように、石川淳も革命に於て「コワイのは運動の法則に反する暴力」であり、「できるだけすくない人民の流血の量をもつて」「平和的に、また建設的」に行われるものだといふ(以上『革命とは何か』)持論に基づき、江戸末期の「ええちやないか」運動がまさにそれと合致していると考えた所以であらう。

江戸末期のこのような民衆運動は一揆や世直しで見られるように遠い昔からである。では、何を以て江戸がより実現性が高かつたのであろうか。内記にいわせているところを二ヶ所引いて見よう。

このわれらの側から、今日世上のあらそひを見て、去就いづれが利か。幕府の運命今や尽きた。つぶれる幕府をしてまづ天朝をつぶさしめよ。勤王を唱へる肚黒き悪人ども、名を天朝に借りて事を成さうとはかる。悪人、ほろぼすべし。この世を天朝の世とはさせるな。これぞわれらが宿願のさまたげと知れ。悪人を討たしめてのち、傷つける幕府を討つはわれらの任ぢや。われらの世となつてこそ、はじめて開国の大業は成るぞ。さしあつて、掃部頭の正道、かへつてわれらには幸便とおもへ。かれをしてその欲するところをおこなはしめるに如かずぢやて。

わしは天明の田沼がころざして成しえなかつた開国の大事を、手おくれには似るが、今この掃部頭をして成さしめやうとする。これもとより幕府延命のためではない。かねてみなみなにもおりにふれて申し開けたやうに、しばらく幕府の力を強大にして、かの京の禁廷といふ悪龍を調伏させるためぢや。悪龍息をひそめたのちは、大老なものぞ、どのみち短檠のともしびの、長つづきはせぬ幕府の運命だ。これを一息に吹き消すべし。

幕府も禁廷も悪龍であり、幕府にして朝廷の「悪人を討たしめてのち、傷つける幕府を討つはわれらの任ぢや。われらの世となつてこそ、はじめて開国の大業は成る」とは、政治に於て最も不安定であり、弱まつた時期であることを物語っており、故に「われらの世」とするには戦後がそうであつたように絶好のチャン

スとして共通している。とはいえ、この江戸は戦後のそれとはまた違う背景を呈している。それは先述したように戦後の近代が与えられた世の中なのに対して、この江戸に於ける民衆一揆は自分たちの力で世直しを成し遂げ、そこに地上楽園の宿願を成そうとしている。この一角を始め、乞食非人たちの血の通った民衆蜂起こそが江戸にミレニアムの思想を果たしうる所以である。「江戸がからになる日」とはまさにこのことに他ならない。野口武彦は「幕府の権力喪失」「江戸がからになる日」である（前掲書）としている。しかし、それは江戸幕府の権力消失のみではなく、朝廷のそれも潰え、乞食非人たちによる「われらの世」の開けこそが空になる江戸である。いわゆる地上楽園なのではあるまいか。

ところが、一角や乞食非人たちにとつて夢見ていたはずの地上楽園はついにこの江戸に訪れることはなかった。ただ、それへの永久的精神運動は一角に於て垣間見ることができる。

二

この地上楽園の建設の失敗については次章に譲ることにして、ここではその遠因である一角と内記、その他の人物の策略と心底に潜めている魂胆について考察をしたい。言い換えれば、この隠れ切支丹の内記と松太夫が目指す地上楽園、それから盗人の一角が夢見る江戸には大きな溝が横たわっている。もつと端的に言えば、前者は地上楽園を訴えながら、その一方に「開国」を唱えている。しかしこの二つの言葉は必ずしも同義の上に立っているものではない。それから他方は幕府や禁廷が作り上げた世の中の仕掛を覆す、いわば世直しを目指している。この両者の間には根底から埋まらぬ思想の上に成り立っているといえる。

では、論を進めるに於て、まず内記と松太夫の関係を述べてから次章で一角と内記の関係をみることにしたい。

「革命の仲間はずれと割れる。昔からそうです。やむを得ないんでしようね」（藤田昌司 前掲書）とは、内記と松太夫のことである。同じ隠れ切支丹であり、この世に地上楽園を実現させることを念願としていた。これほどこの革命に於ても仲間割れをし、さらにそれがエスカレートすれば、それこそ暴力を伴う組織内での対立や対抗の内ゲバに発展していく。ジェームズ・ジョルが述べている（前

掲書）ようにこの内ゲバを露呈しているのは、内記を中心とする「千年会」のグループと松太夫のグループである。この内ゲバが一つの方法として描かれていることについて、恰もこれが主題であるかの如く「内ゲバがこの小説の醍醐味」（藤田昌司 前掲書）だとか、「この小説は、階級間闘争ではなく階級内闘争であって、内ゲバ小説である」（竹内清己 『石川淳研究』——『至福千年』論ノート——その時空間と人物設定）平成三・十一 森安理文・本田典国共著）とする感論も散見できる。確かに内ゲバが最初からずっと描かれてはいるがそれはこの小説の枝葉の部分に過ぎない。この対立の構造については渡辺喜一郎『石川淳研究』——「石川淳の江戸と革命幻想——『至福千年』論のために——」（昭和六二・一一）の論を参照されたい。

さて、そもそも内ゲバとは同じ思想や理想を持ちながら、それを実現する際に方法や手段の違いから収拾がつかず、その反動的エネルギーが暴力と化して仲間同士が闘うという愚にもつかない行動なのである。しかし、ここで見る内ゲバは一角が「千年会」に属しているという前提に於て考えられるものである。換言すれば、一角が内記の下で活躍をしているのは確かであるが、果たしてその行為を一角と同一視できるかどうかということである。上記した二つの論は概ねこの線上での認識であろうか。ところがそれは全く的外れであるとはいえない。何故なら一角はそもそも彼らの宗教なんか信じていないし、内記も「なかなかのしたたかもの。使ひ道に依つてはずぶん役に立たうに」で判るように最初から彼を利用してしようとしたか考えていないからに他ならない。だから、内ゲバは内記と松太夫とに於てであり、一角はむしろそれを利用して立っている立場と見るべきであろう。

要するに内ゲバはこの小説に於て一つの方法に過ぎなかったのである。

では、早速内記と松太夫の関係に移ることにする。

松太夫の見る内記は「火にして火にあらず。さては白狐を使つたな。どうも加茂どのの筋があやしいとはにらんでゐたが、はたしてそれであつたか。せつかく切支丹の物識も、こころねぢけては手におへぬ」ものであり、さらに「ひとを殺し、筋目をやぶり、世をさはがす。それがなんのためとも知れぬ。西洋でいふ無政府のたぐひではないか」といい、「およそ富と力とのまぼろしをそそのかすやうなもののない世界をば、一千年の王土とは呼ぶぞ。しかるに、人をけしかけるに

富と力とのまぼろしをもつてして、この至上の楽土をまのあたりに作り出さうとは、事の顛倒ははなはだしい」と非難している。ところが、ここで注目したいのは「およそ富と力とのまぼろしをそのかすやうなもののない世界をば、一千年の王土と呼ぶ」（傍点・引用者 以下同様）といいながら、「わたしはわたしなりに、富といふものについて目をひらいた。富者を駱駝になぞらへた聖なるおことはは耳にきびしいが、それは凡下の及びもつかぬ境のこと。凡下がこころのやすらぎをせめて地上にもとめるためには、またせめて地獄へのおとし穴を避けるためには、富こそむしろ一つの手段ではないか」とは矛盾そのものである。河上徹太郎がいうように「切支丹といえ、ひたすらクルスにすがる法悦に生き、残酷な殉教をもともしない忍従の姿が常識」なのである。さらに「この終末観的な絶望がミレニアムの信仰を生む訳だが、では彼らにどこまで宗教心があるのかと見れば、考えようによってはそんなものは一かけらもないといえるところにこの小説の痛快なところがある」（『河上徹太郎全集』六巻―「石川淳」至福千年）ように松太夫だけでなく、それは内記にも同じことがいえる。彼らのいう「至上の楽土」や地上楽園とは所詮戯言に過ぎないのである。

内記の「われらの側から、今日世上のあらそひを見て、去就いづれが利か。幕府の運命今や尽きた。つづれる幕府をしてまづ天朝をつぶさしめよ。勤王を唱へる肚黒き悪人ども、名を天朝に借りて事を成さうとはかる。悪人、ほろぼすべし。この世を天朝の世とはさせるな。これぞわれらが宿願のさまたげと知れ。―中略―われらの世となつてこそ、はじめて開国の大業は成るぞ」とは、如何にもそこに「千年王国思想」が実現するかにようにみえるが、しかし「開国の大業」の意味を分析すれば直ちに内記の正体は知れるものである。

この内記批判は松太夫だけではない。内記と同じ宗門に属し、彼に仕えてきた更源がいる。彼は途中内記から離れて行き、野垂れ死になる末路を踏むわけであるが、それは「いかに宗門のため、万民のためとはいへ、地上にあらそひの火を焚きつけようとして、ひとを殺し財をやぶり、世間が悪と見るところをおこなつてはばからぬとは、使徒の道をつらぬくかどうか」という疑問からであった。それは河上徹太郎のいう信者の姿とは掛け離れたところに内記の「開国の大業」がある。さらに「さかづきにそそぐのは葡萄の酒ならず、まさに人間の血。（中略）今、老師みづから力に酔つて血のまぼろしを見る。これもまぼろしに似てまぼろ

しに非ずとすれば、やがて現ずるといふ楽土はいかなる世界か。ねがはくは仔細に示したまへ。神の国と称して、あるひは魔の国」と化してしまふからである。まさに内記の「千年会」が目指す真の目的、それは「開国の大業」を成し遂げた「魔の国」に他ならない。この「開国の大業」を内記自身の言葉に窺える。「開国といへばまづ交易ぢや。薩摩はむかしから抜荷に年季を入れた国がらゆゑ、外国相手の商法に如才はあるまい。今日いちはやく生糸をもつて取引の道を切りひらいたとすれば、ほんの交易の一端とはいへ、これすなはち開国のさきがけ」であり、「大海の水の渺渺たるを夢みる。これ聖地を夢みていまだそこに至らぬものぢや。聖地は他なし。今この地ぢや。この地をけがすものを討ちはらへば、やがては地上楽園とならう。ゆめうたがふな。われらの宿願またここにある」とする世界は千年至福どころか、そこには経済による富の江戸が控えている。

実際この作品が書かれたのは序でも判るように東京オリンピックの翌年である。作者は『西游日録』（昭和四十・三）八『展望』に前年に行われたオリンピックについて不快感を述べている。「オリンピックの東京といふ逆上ぶりを見ないですませるためには、ちやうどわたり船であつた」と、ソヴィエト・ライターズ・ユニオンからの招待に応じて旅行（昭和三九・二七（横浜）く十・二九（フランス）し、フランスに入つては特別に用もないまま一ヶ月間も滞在する。そうして、オリンピックが終わつたときに帰国するという徹底振りである。内記の「開国の大業」云々はこれと無縁ではあるまい。

神に奉られ、また松太夫の配下に殺されてしまふ雲丸は「わが行く方に楽土あり。われにしたがつて楽土に入らんとならば、まづ悪龍を封ずるためにたたかへ。わが下知にそむくな。悪龍のかたわれはなんぢらの列の中にもをるぞ。それなる内記こそ聖教の賊」だという。内記は「千年会」と称して実は私利私欲や権力に満ちた幕府や朝廷と変らぬ「悪龍」に過ぎなかつたといえる。

以上のように松太夫が「横浜の新居はすなはち商館。仕事はすなはち開国。交易商売にはくろうともあるだらうが、開国開花にかけては日本中しろうとばかりだ。みなもめいめいその一箇とおもへ。従来どほり、富を積んで信をつらぬくといふ一念はわたしに於て渝らない」ようにお互いが誹謗中傷を行つても彼も内記と同様に同じ穴の貉なのである。

三

この章では一角のミレニアム思想との関係についてである。勿論この関係の解明によって内記との関係も自然と明らかになってくるであろう。

一角はそもそも盗人であった。これは野口武彦がいうように「盗賊・非人・乞食」といふ俗の俗なる三位一体トリニテ（前掲書）の「俗の俗」、「下司の中の下司」に位置していることを意味しており、故に一角のみではなく彼らの千年王国への念願は必然性を獲得するわけである。いや、もっと正確にいうならばこの「世の中の仕掛」を転覆することに於て真の世直しが成されるという意味である。内記が「過ぎし世はみな罪の世ぢや。このうへさらにむなく一日すこせば一日の罪。一年を過ぎせば一年の罪ぢや」と説き、「今日ただいま、かの悪龍を捕へてこれを封ずることはすなはちわれらの任」と煽っているのもその所以である。そこで一角が「もつてうまれた悪一本のおれの性根。これはぶつたたいでも直らねえ」と自分の素性を語った上で、「その悪龍とかいふものをふんづかまへて封じこめたあ

かつきには、がらりと世の中がはつて、おれはもつてうまれた性根のまま、今まで犯した罪の重荷をしよつたまま、なんの気がね苦勞もなく、そのあたらしい世の中にぬつとはひつて行くと、とたんにどんでんがへし、おれはうまれかはつたやうに」なることを思い浮かべる。これは内記が説く地上楽園とは違つた意味に於て一角は受け止めている。地上楽園とは「悪龍」を封じこめた後に開けるであろう世に他ならない。即ち千年王国、△至福千年▽である。

悪龍退治の荒事は、このおれにまかせてもらはう。禁廷だらうと幕府だらうと、これなる金剛丈をもつてたたひとうちだ。おれは近頃料簡がはつたよ。

以前はひとを殺しものを盗むたびごとに、これが罪を犯したといふことかと、ひそかにくるしいおもひをしたが、今ではそのおなじじことがたのしくなつた。——中略——悪をかさねるのは善を積むにおなじじといふ勘定になるだらう。この真心を押しとほして、悪龍封印の日に乗りこめば、そこでおれの心はよいはうにうまれかはると見きはめた。罪の汚名をきせられたおれの所行のかずかずはめでたく聖水にきよめられたうへに、祝福の恩賞までさづかつて、男一匹、しあはせなやつが御誕生とお目にかける。またその場所が遠い見しらぬ国の空ではなくて、今ここにゐるこの江戸の土地で、つまりこの江戸がたち

まち見たこともない地上楽園とやらに化けてしまふとは、この大手妻、なんと奇妙か。一世一代、おれは地上楽園をぬすんでみせるぞ。

彼のいう「罪」が「善」になることは勿論「悪龍退治」の謂であり、それを積み重ねることは地上楽園を盗むことに他ならない。換言すれば、禁廷と幕府の悪龍を退治することによって訪れる地上楽園とは、先述したようにこの「世の中の仕掛」を転覆したことによって顕現する世なのである。

だから地上楽園とは例えば『修羅』（昭和三三・七『中央公論』）の胡摩が文反故を燃やし、奪われた身分の奪還によって現前する世の中のそれに近似している。ただし、胡摩は盗人ではない。盗人といえ、後に書かれた『六道遊行』（昭和五六・六〇五七・十二『すばる』）の小橋を想起するだらう。咒を盗み、輪廻を打ち切り、葛城山に趣くのだが、それは新たな生への確信として、彼の△最後の大願▽であった。即ち盗賊という意味では小橋に似てはいるが必ずしも意味を同じくしない。要するに『修羅』的のものであり、或はユートピアの世界を描いたともいえる『紫苑物語』の宗頼の世界かも知れない。

ともかく、内記にミレニアムの思想を窺うことは不可能である。たとえ、彼が自分こそ「神」だといってもそれは所詮砂上の楼閣に過ぎない。

次の引用は「千年会」を巡って、内記と一角の相容れない認識が見て取れる部分である。

（内記）世のみだれに乗じて、諸人なけなしの力を出しあふときは、すなはち一団の大力量となつて、あらたなる世をつくるに至らう。無より有に至る。これ楽土一千年のいしずちや。聖教の極意、このあかつきに現前するとおもへ。もし教義の掟にしたがはぬものあるときは……。

（一角）なんとなされます。

（内記）死をあたへるのみぢや。

一角が乗り出して、

御隠居の下知に従はぬやつらは、みなぶつたぎるとおつしやるか。

内記についてはここでも判るやうに「千年会」に背くもの、より端的にいえば、彼に背くもの、いわゆる「開國の大業」に妨げなるものは死を以つて報いることになる。これは「神」の教えなんかは一欠けらも見受けられないところに至上楽

園は所詮騙りに過ぎなかったことを物語っている。

これに対して前章で述べたように内記は「使ひ道に依つてはずゐぶん役に立たう」ものとして一角を利用してはいるが、一角はそれを逆手にとつて内記を利用していることが判る。それは自分が「神」だということにあらざらなかつた。これは内記が自らを神だと嘯くことへの嘲笑であり、また彼が為すべき「大仕事」でもあつた。彼は内記を倒し、このようにいう。

これ見よ、内記。わが千年会の骨髄たる乞食非人の中でも、いやしきもの、ねぢけたものの数をすぐつて、ここに押し寄せたぞ。こやつら、生涯いふところ、なすところ、一として罪にあたらざるものなく、悪にあらずといふことなし。その本性まざまざとかたちにあらはれて、うまれついて五体満足ならず、ちんば、てんぼう、片目、片耳、鼻ひしげ、ゆがんだしやつつらを天日にさらして、おそれげもなく横行する。これはまなんで至りうべき境でない。およそ下司の中の下司、身分の底をついて下下(げげ)にうまれ、この世に生を享けたことが罪ときはまつたものを、日本のむかしにも悪人と呼ぶ。こやつらはその生得自然の悪人だ。

この「およそ下司の中の下司、身分の底をついて下下(げげ)にうまれ、この世に生を享けたことが罪ときはまつたものを、日本のむかしにも悪人」とする仕掛を作つた禁廷や幕府を逆にこの位に貶めることこそ一角の念願する世界であり、「大仕事」に他ならない。内記が幕府をして禁廷を倒し、後に幕府を滅ぼし、千年王国を建立するという目論見は、そのまま一角が内記にして守備を整わせ、自分がその位を盗むということを実行しているように見受けられる。それは一角にとつては当然であつたといえる。そもそも内記は神官であり、その他の松太夫や冬峨とは普旗本で蘭学を学んだ仲間である。だから、彼らは一角と違い、官職に当たる身分である。一角からは彼らも倒すべき敵であつた。

だから、内記や松太夫が隠れ切支丹を名のり、「開国」とともに富を得ようとするのは幕末が新政府に変わり、その隙を狙つて利得へと一足早く凡出する輩は無数にいた筈である。これと関連付けてもう一度想起したいのがオリソニックのことである。内記が政治的混乱を利用し「生糸」の独占を狙うのと、オリソニックによる経済発展で富を得ようとする人々の野心は同じ構造の上に立つてるといえないか。もしそうだとすれば、作者がこの時期にこの作品を書いた理由、或はモ

チーフを理解することは難くない。

また、一角が「神」になるというのには重要な意味が隠されている。「今、心耳をすまして聖教の微旨に聴き入るに、常人といへども、無道をおそれず、悪逆をはたらき、我意のつものところをおこなつて、はばかりなく押しつらぬけば、つひに神はわが身のうちにこそあれ、われこそ神とさとして、無上正覚をうるに至るべし。まして、生得自然の悪人にとつて、これぞ福音よ」とは、一角の念願が叶うことを意味すると同時に「世の中の仕掛」の転倒を意味している。

乞食がイエス・クリストへの見立ては『焼跡のイエス』のボロを纏った少年にも見ることができ、一角のような「世の中の仕掛」の転覆を伴つた運動は見られない。ただしそこにはそれへの可能性を暗示していることを読みとることができる。

一角がいうように「俗間の奔走につかれ、邪念の火に焼かれて、やきもき、いらいら、相好あさましく崩れ」ていく内記を見下ろしながら一角は「事のやぶれをおもつて、立つことをためらふといふか。これぞ破滅をおそれるころだ。破滅を踏まへて立つ」神としてそり立つ。そこに内記が失敗を恐れる「開国の大業」がある。それに対して一角の「いまこそおれは神」だという意味は今この地に新しい国づくりを始めなければならないという千年王国が対照的に屹立している。それが江戸末期の「ええぢやないか」の一揆としてこの江戸に表出し、乞食非人を問はずの民衆蜂起となつた。

行列はちつとしてゐない。たれかが舞ひ出せばみな舞つて、くるくる、がやがや、祭の手古舞のやうに練つて行くうちに、突然ものに狂つたか、どつと殺気だつて、相手かまはぬ喧嘩ををはじめに、白昼をおそれぬぶちこはしとひろがつて、すは市中の一揆かと、役人がおつとり刀で駆けつけて来て見れば、なんのことだ、殺気はしすまつて、また浮かれ調子になるのに、もとより多勢のいきほひ、これを制しやうもなく、行列はさらにふくれあがるばかり、晴著の娘、絆纏の若いもの、番頭、丁稚、のらくらむすこ、あそびにんも加はつて、練りつづける中から、いつか囃子のやうな声があがつて、それからそれと声は鳴りひびいた。

ええぢやないか
ええぢやないか

世直しを願って始まった「ええぢやないか」の民衆蜂起によって開けるこの世が「イエス・キリスト」が「悪龍」を破滅させ、千年王国を築くのと同様の意味に於て一角のいう「神」は成り立つものであり、それは「身分の底をついて下下^{ゲゲ}にうまれ、この世に生を享けたことが罪ときはまつたもの」によってのみこの世は完成するものである。

ところが、江戸に一揆が始まったことを見とどけて、一角は横浜に向けて出発する。この最後の描写が先行文献の誤謬を生む要因でもあろうか。

「船だ船だ黒船だ」という一角の「ことばも調子もあきらかにみなのかげに合はなかつた。天狗の面は行列から突き出されたか、あるひはみづから飛び出したか、金剛杖を取り直すと、東海道をいつさんに横浜のほうにむかつて駆け去って行く。」

さて、横浜といえば内記や松太夫が念願としている「相生丸」が寄港しているところである。「黒船」や「横浜」はいわゆる「開国」を意味していた。とすれば、一角が横浜を目指すのは何故だろうか。また果たして先例に見るように挫折を意味するものであろうか。

ところが、これは氏の作品にみる一つのパターンであり、それはその運動の延長を意味するものである。いわゆる一つの運動が終焉したとしてもそこで終わるのではなく、それと同様の運動が次にまた始まることへの暗示なのである。特に革命小説といわれる小説に顕著に描かれている。例えば、『鷹』（昭和二八・三）『群像』では、「国助はその灯を目あてに、塀の上から身ををどらせて、一気に運河の中に飛びこんでいく描写、『珊瑚』（昭和二八・十）『群像』では当麻が「夜来の小雨はふりやまうとして、空にうすあかりがさして来た。当麻はさらに駆けた。その性急な足どりに、おのれもまたひとびとの流の中に飛びこまうとする気合がこもつて来た」姿や、また『鳴神』（昭和二九・三）『新潮』では「なに、片腕だつて自転車ぐらゐにはのれるぞ。柿夫はわつとさげふやうに、それに飛びついた」柿夫、さらにいえば『虹』（昭和二九・五・十二）『文学界』では久太が虹に乗り移つてその虹とともに消えていく描写がそれである。もつと巡らしてみれば、『荒魂』の佐太、『六道遊行』の小楯にも同様の描写を見ることが出来る。

だから、この最後の場面は一角の次なる運動への始まりと考へたほうが有益である。「船だ船だ黒船だ」と叫び、「ことばも調子もあきらかにみなのかげに合

はなかつた」ことに判るように彼の運動はまさに「黒船」にあるといえる。勿論内記や他の人物たちが目指すそれとは異質のものであることはいうまでもない。川村湊が一角や松太夫、それから冬峨たちが「黒船」を目指すのは「彼らはこの八中心の虚無の支配する日本という国から、それぞれの方法での八中心を企てた」のであり、この「海外脱出というモチーフは、単なる逃亡ではなく、確信的な『政治亡命』にほかならない」(『ユリイカ』)。「水と逃亡」『至福千年』の世界(一九八八・七)とする説や渡辺喜一郎が「二極の一方である『革命幻想』は、一角、冬峨の逃避行によって、『形』が保たれ、行先に観念上のユートピアの世界をそうぞうさせる」(前掲書)というが、少なくとも一角の横浜行きは必ずしも「海外脱出」の「政治亡命」でもなく、「逃避行」でもない。それは一角が渡航を急ぐ冬峨に「ちかごろは人斬がおほつぱらにはやるが、目につかないところでは渡航ということがはやる」といい、それは「つぶれるにきまつた幕府のしつぽにありがたく御出世といふ皮算用」と切り捨てた上で、「やつぱりそれまでのおひとであつたか。やれやれ、こいつはだいたい見そこなつたぞ」と詰っているところからでも判るものである。いうまでもなく冬峨は内記同様の人物に過ぎなかつたのである。だから、このように「黒船」が意味するところ——「御出世といふ皮算用」を自論む者や内記のような者を思い出せば一角の「金剛杖」の先は判るものであろう。

以上のように内記が江戸に彼の夢である地上楽園——「開国の大業」の建設は失敗したが、一角の夢は「開国」と称するものとは掛け離れたものに他ならない。いわゆる国や組織といったものを否定するところに立っているといえる。故に、内記の地上楽園を滅ぼすことは一角の一つの運動であり、また「ええぢやないか」の民衆運動が起きたところで彼はその内部に止まることを拒否している。「ええぢやないか」は彼にとつて一つの運動に過ぎないものであり、故に次なるそれへの始まりでもある。まさにそこに八千年至福を夢見るのである。付言すれば、ミレニアム思想を成就するのはこの江戸に於ても如何に難しいかということ、しかしながらそれを諦めることはできないという精神の運動を一角に於て垣間見ることが出来るのである。

結

一角が真に盗もうとしたものは何だろうか、ということがこの作品の主題になっている。

それは内記の「白狐」如きものではない。そこには大鹽平八郎の乱にあるような、「すくなくとも文面が農民にむかつて呼びかけてゐる」(『革命家の夢』) ことよつて「大鹽の精神の努力は批判の如何を問はず、政治の實際に於て、空虚なる空間を具体的に充実させようとするところに存した」(『森鷗外』) — 「傍観者の事業について」昭和一六・十二 三笠書房刊) 運動であり、また富士講や伊勢参りの「おかげまいり」に内在している民衆の大きなエネルギーである。換言すれば、「民衆信仰の歴史的な変化を基盤として発生した宗教運動」(藤谷俊雄『「おかげまいり」と「ええぢやないか」一九六八・五岩波新書) としての「おかげまいり」は、民衆の巨大な組織となつて測り知れないエネルギーとして江戸に流れ込み、「ええぢやないか」と相俟つて膨れ上がつていく、いわゆる幕府や諸藩の禁令や統制に抑圧されていた民衆の自己解放運動として見ることもできる。民衆は國家を必要としないが、制度や組織によつて統制を必要とするのは権力者であり、その仕掛を利用し、民衆を支配下に置こうとする。封建社会の変革を求める「おかげまいり」の運動や神の奇瑞を願う「お札振り」は時には積極的に表出したものの微弱であつたが故にその願ひには直接結びついたことはなかつた。しかし、幕府に対する叛逆の性格は色濃く内在していたといえる。故にこの民衆運動は革命運動に近似してはいるが、むしろアナキイの意味に於て理解されるべきものである。その故にそこにミレニアム思想、いわゆるユートピアの世界を夢想しているといえる。

要するに、この江戸末期に「ミレニアム思想」を置く所以は幕末と新政府樹立との間の混乱期であつたということに他ならない。そこに民衆を中心としたユートピア思想を建設する所以である。それからまた、作者が明治政府を否定(描写されていないこと)していることからでも判るように國家成立への否定もアナキストの一角を支えている仕掛として理解できるものである。

「ええぢやないか」の民衆運動が微温的に、或は失敗に終わったことを指摘する先行文献が多いのは、史実に照らし合わせた見解ではあるまいかと思われる。

實際「ええぢやないか」運動が民衆のエネルギーが集中して爆発し、封建社会の変革や政治の転覆と直接に結びついてはいなかった。むしろ一つの騒動として自然消滅している。しかし、それは歴史上の話であつて『至福千年』に於ける「ええぢやないか」をそれに照らし合わせる必要は全くない。

椎名麟三が「たしかに、『至福千年』はないものであろう。しかし人間の郷愁のなかに、そして希望のなかにそれはいつも歴然と存在している。それは人間の歴史にかかわると同時に個人の内部にもかかわっている。石川淳さんは、この事実をこの作品の真只中にどっかりすえた。それがこの作品の一番大きな手柄だ」(『週刊読書人』昭和四二年五月八日 後、『石川淳全集』(一九八九年版) 八巻月報 — 「横溢する自由な精神」に収録) とする見解はともかく、一角の蜂起は「およそ國家権力というものの全面否定」(野口武彦『海燕』) であり、そこに民衆の拠り所一千年至福を捜し求めたアナキストの運動であつたといえる。

参考文献

- 河上徹太郎 「石川淳『至福千年』」(『河上徹太郎全集』六卷)
- 野口 武彦 『海燕』 — 「江戸がからになる日」昭和六三・三
- 野口 武彦 『文学界』 — 「メタフィジックとしての『俳諧』」昭和六三・三
- 澁澤 龍彦 『至福千年』 — 「解説」一九八三・八岩波書店
- 金井美奈子 『群像』 — 「教訓を学ぶ」昭和六三・三
- 椎名 麟三 『週刊読書人』 — 「横溢する自由な精神」昭和四二・五・八
- 竹内 清己 『石川淳研究』森安理文・本田典国共著 平成三・十一
- 川村 湊 『ユリイカ』一九八八・七
- 渡辺喜一郎 『石川淳研究』昭和六二・十一
- 佐々木基一 『文芸』昭和四二・五
- 秋山駿・柴田翔・竹西寛子・野口武彦・日野啓三、丸谷才一(司念)『文芸』昭和四二・五
- 藤田 昌司 『作家に聞いたちよつといひ話』一九九〇・十一・三〇
- 書評 『群像』 昭和四二・四